

書 評

「郷土」研究会編：『郷土－表象と実践－』

嵯峨野書院 2003年6月

A5版 xvi + 272頁 2,800円(本体)

本書の12人の執筆者を中心にした4年ほどの共同研究の成果であるが、研究会メンバーを代表して「あとがき」を書いている大城直樹など3名の執筆者は、1998年4月に刊行された『空間から場所へ－地理学的想像力の探求－』（古今書院、なお評者はこの本の書評を『地理学評論』72巻1999年に発表した）の執筆や編集にあたっている。1998年の書物における問題関心が、「空間」・「風景」・「場所」がいかにして社会的に再生産され、また解釈されているかの分析にあった、換言すれば人文地理学が、文化と経済、文化と政治、文化と社会の相互交渉と相互矛盾の場を否応なくかたちづくっていることの確認であったことを想起すれば、「郷土」が、それが地理的想像力（本書では「地理学的想像力」という用語も用いられている）によって構築されたものであるのに、多様なスケールで「自然」化され「自明なもの」となるとともに、装置として作動することに注目して、それをいくつかの局面において分析しようとする本書が、1998年の書物を継承し発展させたものであることは明かである。日本および外国における事例にもとづいたこれら12の局面は、それぞれ「郷土意識の形成」「国民国家と郷土／故郷の喪失」「『郷土』の詩学と政治学」の3部に分けられ、それぞれの部のはじめには問題点と各章の要旨を紹介した2ページのintroductionがつけられている。

本書でも引用されているが、成田龍一『「故郷」という物語』（吉川弘文館 1998）によれば、「故郷がさかんに語られる時期－1880年代、1930年代、1960年代後半から70年代前半－は、いずれも国民国家の節目であり、それぞれ国民国家の成立期、転換期、変容期」であったが、地理学との関連でみれば、1930年代前半に「郷土教育」が議論された時期（関戸明子と加藤政洋が指摘しているように、その歴史は明治初期の開発主義教育の紹介にまでさかのぼる）があったが、風景のイデオロギーと場所のポリティックスを探求してきた

本書の執筆者たちをはじめとする日本の人文地理学者が、成田などの歴史学者や社会学者と問題意識を共有しつつ、表象でもあり実践でもある「郷土」を研究テーマに据えるようになったこの10年間は、第二の「郷土」地理研究期であるともいえよう。そしてまたこの10年が、政治的にも経済的にも社会・文化的にも、日本という国民国家が大きく変質しつつある時期であることも論をまたない。

本書の内容はたしかに多様であり、したがって「郷土」の研究が豊かな可能性をもっていることを示しているから、21世紀の郷土学研究を担う論文集あるいは学術誌の第1号とみなすことも可能である（『地理』48巻8号における岡本耕平の書評）が、「郷土」が特定の空間的領域を必要とする地理的想像力であることを表象と実践の多様な側面で説得的に示そうとした本書は、それなりに完結した書物として成功していると考えられる。

第1部において重要なのは、福田珠己がシラキュースのオノンダガ歴史協会の展示の分析から主張しているように、「地域」やその歴史を記録し表現することは、それらの「知識を共有すべき『私たち』を創出すること」なのであり、この点において「郷土」の空間スケールは可変的であり「日本」あるいは「国土」というスケールに接続される回路が存在するのである。民藝運動と結びつくことによって再生した山陰の牛ノ戸窯を事例としてとりあげた小島邦江によっても、「伝統」が創出されるものであり、民藝運動とはナショナルアイデンティティと表裏一体にあるローカルなレベルでのアイデンティティや伝統の問い直しであったことが指摘されている。さらに、「郷土」がさかんに語られた昭和初期に民藝運動が成立したのであるし、師範学校においても牛ノ戸窯が郷土教材にされていたという指摘も重要である。

15年戦争期の郷土教育を、明治期以降試みられてきた郷土教育の帰結であるとともに、「郷土」を「皇国」に結びつけるチャンネルがはっきりと出てきた（当時のコンテクストにおいて「国民」とは「皇国の臣民」であった）ものとして位置づけた関戸の第1章では、群馬県師範学校附属国民

学校の実践の分析のみでなく、台湾では日本統治以前の歴史的事項は扱われず、朝鮮では「郷土」という言葉すら使われなかったという指摘も注目される。長野県において明治30年代に成立した地理歴史唱歌は、郷土教育と密接に関連した一種の郷土誌であったことを作詞者の教育実践とテキストの分析を通じて説得的に示した加藤の第2章も貴重であるが、愛唱された唱歌がどのようなメロディであったかという好奇心がわいてくる。『信濃の国』などいくつかの郷土唱歌は、山口幸夫・原口美紀子『郷土かるたと郷土唱歌』（近代文明社 1995）などに楽譜も採録されているが、旋律もまたイデオロギーに違いないのだから、その分析をこのような地理学の論文集に求めるのは無い物ねだりなのだろうか。

第2部には、「郷土」あるいは故郷という概念の「創出」が、直接的にせよ間接的にせよ国民国家と関連することを示した5つの事例研究が集められている。荒山正彦は1927年の日本新八景の選定における組織票の動きが、風景のナショナリズムを自明の前提としてローカルな風景を手がかりにした郷土づくり運動であったことを指摘し、同時にローカルな社会の戦術は、個別事例の検討を通して明らかにされなければならないという課題を提起している。第6章で金子直樹は、1944年の戦時体制下で祭礼や民俗芸能が「郷土」の文化遺産として新たな意味を付与され、そのいくつかは戦後も継承されたし、翼賛文化運動における祭礼・民俗芸能の活用は、1975年以降の文化財行政に通じる側面をもったことを指摘している。今後具体的事例研究において深められなければならない課題であろう。現在の東京都日暮区の碑文谷に1902年に生まれ、府立園芸学校で学び、地元村農会技手を経て、東京市公園課に勤務し、郷土史誌家としていくつかの業績を残した（1981年没）富岡丘蔵の言説を分析した石崎尚人は、都市エリート層による田園への一方的なまなざしをもってではなく、郷土風景から床しさを剥奪していく急速な郊外化を問題にして、ローカルな実務家として郊外の風景の隙間に緑を残すというかたちで「郷土」を創り出そうとした富岡の事績に光をあてている。富岡が残した事物は当時の郊外化の趨勢においてはノイズであったかもしれないが、現在においては、東京都重要文化財に指定さ

れるなどポストモダン的な意味をもつようになっていく。東京の郊外化は、もちろん国民国家を背景にしたものではあるが、富岡の営為が彼が生きた時代の国民国家とどう関わっていたのかという分析はこの論文においてはなされていない。高度経済成長期における都市流入者の郷友会を主に分析した山内覚は、出郷者第1世代は「故郷」だけに執着することもなければ、それから完全に切り離された都市人でもなく、重層的なネットワークを形成していることを確認する。第2世代、第3世代については、酒鬼薔薇事件にふれながら、彼らにとっての「故郷」たる都市がネットワークの結集軸としての意味をもたないこと、マフェゾリの「小集団の時代」（ミシェル・マフェゾリ、古田幸男訳『小集団の時代—大衆社会における個人主義の衰退—』（法政大学出版局 1997））に属することを示唆している。

日本を対象にした4つの論考が異なった時期についてなされているのであるから、国民国家の形成・発展のそれぞれの時期において、人びとが想像＝創造したローカルな場所＝郷土が、国民国家とどのように関連したのかが、各章か introduction で示されたら、この第2部は完結度をさらに高めたであろう。

第7章で潟山健一は、イングランドの「民謡の場所」ロッティンディーンが、都市のエリート層によって「古き良きイングランド」を具現する「郷土」という幻想をもつようになる過程を示している。肝要なことは、外に在る者のみでなく、内に立つ者までが、郷土イメージを歴史的現実から切り離して、幻想としての郷土のなかに生きていることなのであるから、日本の「民謡」にも言及して少しでも良いから具体的指摘をしてもらいたかったが、これは執筆者にとっての将来の課題なのである。他の国の事例がないのであるから、イングランドが国民国家なのか、グレート・ブリテンあるいはUKが国民国家なのかなどという問題を、ここで議論することはできないが、第2部には、国民国家形成の事情が日本やイギリスと非常に異なる国の事例があってもよかったと思われる。フランスについては、工藤康子が近著（『ヨーロッパ文明批判序説 植民地・共和国・オリエンタリズム』 東京大学出版会 2003）で、ミシュレの『タブロー』、ブリュノの『二人の子供のフラ

ンス巡歴』などに言及しながらこの問題を取り扱っているし、植民地の歴史を経験した国においても、独立後数十年あるいは百数十年を経て、国民国家と故郷の創出に関する興味深い問題があるはずなのである。

第3部は、『郷土』の詩学と政治学」と題されて「郷土」が自明化する、あるいは実践される時にどのような政治性やレトリックが介在するかを考察した3章から成っているが、どこに「詩学」があるのか評者にはわからない。レトリックとはカルチュラルポリティクスであり、すぐれて政治的だと考えるからである。

「郷土のもの／郷土のこと」と題された社会学者竹中均の第10章は、郷土の「もの」を対象にする「価値学」である柳宗悦の民藝運動と郷土の「こと」を対象にする「記述学」である柳田國男の日本民俗学という時代を共有した2つの新しいジャンルの相違と緊張関係を分析し、同時に柳田の郷土研究が、1930年代の文部省のイニシアティブによる各自の郷土の事情を明らかにしようとする運動とは一線を画した普遍化・抽象化という方向を目指したものであったことを指摘している。そして、柳田と同じ方向を志向しながらも、民具を研究対象にすることによって、民衆の日常生活と技術の発達を追求しようとした渋沢敬三から宮本常一に至る系譜の学問に注目し、柳田と渋沢の間にあった近さと緊張関係、渋沢と柳田の間にあった接点と対立、そして柳田と柳の間にあったすれ違い、という三角形を提示し、三角形の中心に位置するものとして、郷土とりわけ沖繩を位置づけている。日本民俗学と民藝運動とが決して平行線ではない、交差させる可能性があることを指摘した力作である。中島弘二の第11章は、彼が手がけている国民環境論に対する理論的批判の発展として、和辻風土論を再検討したもので、

1928年にはじまる講義ノート「国民性の考察」から1949年の『倫理学 下巻』へと至る一連の展開として和辻風土論をとらえ直そうとしたものである。紙幅が限られていたためであろうが、第二次世界大戦後の和辻の所論の検討が十分に展開されていないのが残念である。

「地域アイデンティティと歴史意識の交錯と変容」と題された大城直樹の第12章は、サミット後の「沖繩イニシアティブ」をとりあげて、それが沖繩という特定の地域を対象としつつも、人びとの理念や意思を棚上げにして、「自然環境や地理的な位置関係がその運命に大きな影響を与える」とする地政学的実践以外の何ものでもないことを指摘したものである。「沖繩イニシアティブ」は、「被害者的歴史観」の再考を促すものではあるが、加害者としての立場を忘却の深みから浮かび上がらせなければならないという認識が、そこには欠如しているのである。「郷土」は歴史をもつものであり、その歴史においてなにかを「忘却」することによって、そこが「郷土」となり郷土意識が芽生えるのだという大城の問題意識がその背後にある。グローバリゼーションによって新たに顕在化した局地的な地域アイデンティティの一事例として、地政学的な脱／再領域化あるいは同一／差異化の重層的なせめぎあいと、その混成的な編成という郷土をめぐる新しいそしてアクチュアルな問題を提起した論文として注目される。

評者の注文をもふくめて内容を紹介したが、現代地理学にとっての重要なキーワードとして「郷土」に注目したこの研究会のメンバーの着眼点を高く評価したい。そして地理学のプラクティショナーに多くの知的刺激を与えるであろう豊かな内容をもった本書が、広範かつ多数の読者を得るであろうことを願ってやまない。

(竹内啓一)